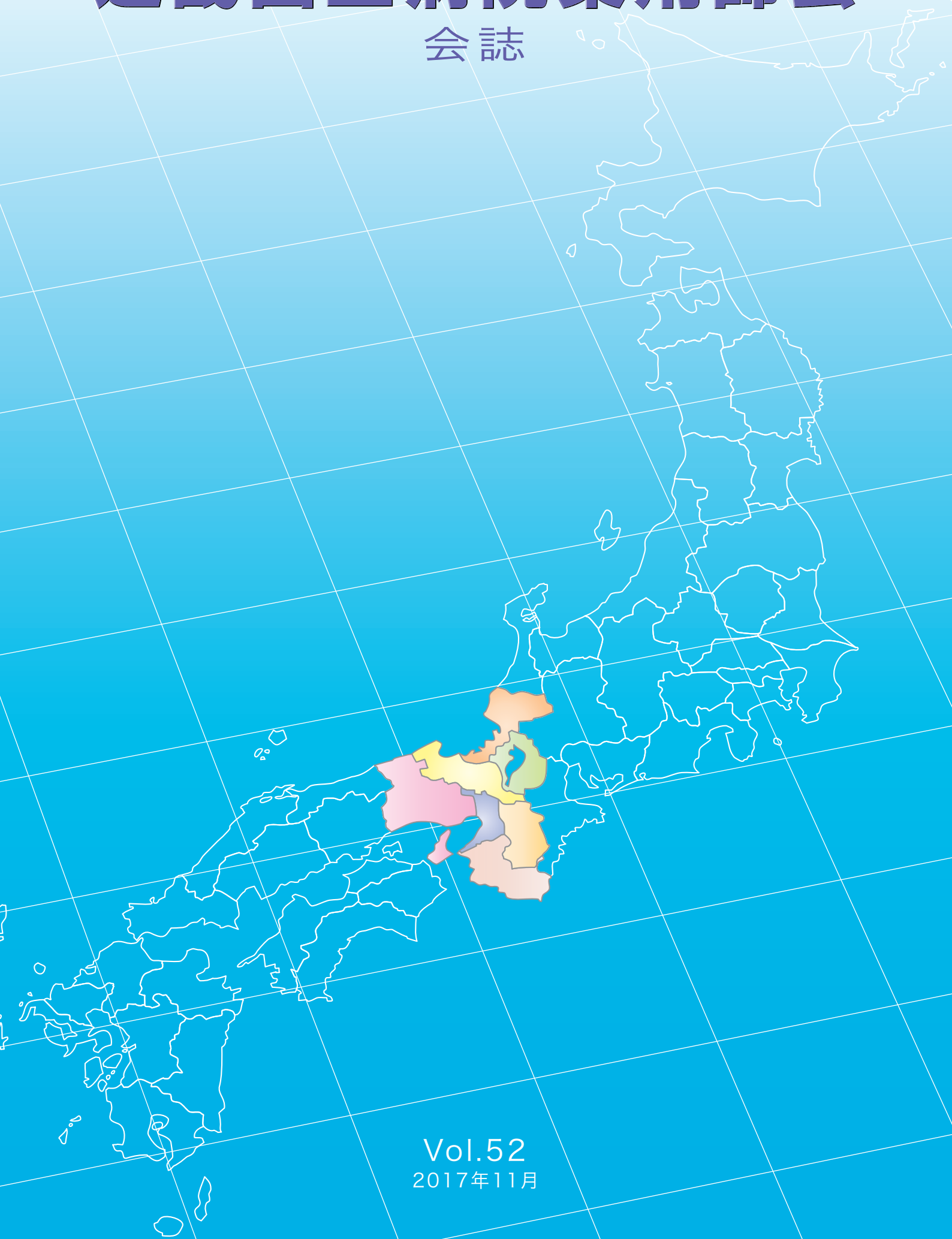


近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.52
2017年11月

目 次

提言～病院薬剤師へ期待されること～.....	2
宇多野病院	吉野 宗宏
薬剤部紹介.....	3
刀根山病院	片岡 綾子
「平成 29 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修」を受講して.....	6
神戸医療センター	荒川 宗徳
「第 27 回日本医療薬学会年会」に参加して.....	7
大阪医療センター	萬浪 綾乃
「第 71 回国立病院総合医学会」に参加して.....	8
近畿中央胸部疾患センター	下川路 亮太
平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会臨時総会報告.....	9
大阪南医療センター	水津 智樹
平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム特別講演会報告.....	10
大阪南医療センター	木本 大樹
平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム報告.....	12
大阪医療センター	明石 直子
「平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム」に参加して.....	14
大阪医療センター	井後 星哉
新採用者紹介.....	15
趣味のページ～20 キロマラソン初挑戦～.....	16
東近江総合医療センター	豊田 悠二
編集後記.....	17

提言～病院薬剤師へ期待されること～

宇多野病院 吉野 宗宏

病院薬剤師を取り巻く環境は急速に変化しており、高齢化、人口の減少、情報技術の進展、グローバル化など医療業界において取り組まなければならない課題は多岐にわたります。病院薬剤師においても、いわゆる「モノ」を対象とした調剤・製剤業務に加え、「ヒト」を対象とした病棟業務が急速に発展しています。高度化かつ複雑化する医療のなかで、薬剤師は医療従事者として、より深く薬物療法に係わることにより医薬品の適正かつ安全使用に貢献することが求められ、病棟における服薬指導、医師への処方提案、最新かつ的確な医薬品情報の提供、薬物療法における治療効果や副作用モニタリング、薬物治療の個別最適化、医療安全確保など業務が拡大しています。他方では、団塊の世代が後期高齢者に達する2025年を迎えるにあたり、地域包括ケアシステムが進行中です。世界に類を見ない超高齢化社会のなかで、高齢者のポリファーマシー問題、認知機能が低下した患者の「老老介護」の環境下での服薬状況など、保険薬局、訪問看護ステーションを始めとする地域医療チームと病院薬剤師の連携強化の必要性を感じています。宇多野病院では訪問看護ステーションを開設しており、薬剤師も在宅への係わりが将来的に増加すると考えられます。退院時共同カンファレンスへの参加調整、地域薬剤師との連携会などを通じて保険薬局薬剤師との連携強化を図りたいと考えます。

今後は、高齢化社会に向けての地域包括ケアシステムの実現に向けた病院機能の分化と連携強化が進められるなど、医療制度の変革が進められています。加えて薬学の目覚ましい進歩、医療の高度化、多様化が進み、薬剤師に求められる機能は大きく変化していると感じます。医師や看護師はより多くのことを薬剤師に求めるようになっており、薬剤師の薬物専門知識はもとより、患者治療に関わるあらゆる臨床現場での経験に基づく提言も求められています。病院薬剤師は積極的な処方提案、医薬品の適正使用の推進、有害反応の早期発見・遷延化の防止、薬害の防止など患者に対する安全な薬物療法の提供により病棟・外来業務の充実及びチーム医療の推進へこれまで以上に質の高い業務への展開を期待されています。

是非、この多大なる薬剤師への期待に個々がスキルアップしながら立ち向かい、近畿国立病院薬剤師としての新しい未来を切り開きましょう。



薬剤部紹介



独立行政法人
国立病院機構

刀根山病院



【病院概要】

国立病院機構刀根山病院は、伊丹空港より車で10分ほどのところに位置しています。交通の便がよだけでなく小高い丘の上にあるため、病棟からはモノレールや飛行機の離発着が見られるという魅力的な場所にあり、甲子園球場の約2.5倍という巨大な敷地内には大きな鯉が住んでいる池や、狸・人懐っこい猫が住んでいる山やテニスコートなどがあり、職員だけでなく、地域の方の憩いの場所にもなっています。



当院は1917年に日本初の公立結核療養所として開所した100年の歴史をもつ呼吸器、神経・筋、整形外科に特化した病院です。呼吸器疾患においては、肺結核、肺がん、非定型

抗酸菌症、慢性気管支炎、気管支拡張症、肺気腫、喘息、肺真菌症、肺線維症、呼吸不全(在宅酸素療法、在宅人工呼吸療法)、心不全など、神経・筋疾患においては筋委縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、重症筋無力症、筋ジストロフィーなどの神経難病を担い、今年度からロボットスーツ「HAL」を導入しました。パーキンソン病については、日本で唯一、光治療やドラッグホリデーも行っています。骨・運動器疾患については、脊椎疾患、関節リウマチ、変形性関節症の疾病について、高度の診断と治療を行っています。



<大正6年開設当時の全景を表したジオラマ>



<平成28年12月 新病棟オープン(左棟)>

「疾患にこだわらず、ぐっすり寝て健康を回復しよう」という目的で睡眠センターを立ち上げ、調剤薬局と連携した睡眠受診レスプログラムを行っています。疾患別の食事が出来るように大学と提携して新たな食事メニューなどの開発や超高齢社会に向けて認知機能や骨粗鬆症にも力を入れています。

薬剤部は、以前は外来棟に配置されていましたが、病棟建て替え時に「薬剤部は病棟に」というコンセプト(だと推察しています)のもとA病棟1階に配置されました。また昨年12月には、筋ジストロフィー病棟(B病棟)が開棟し、大きく生まれ変わりました。

【薬剤部概要】

薬剤部は薬剤部長、副薬剤部長、主任4名(調剤主任・製剤主任・治験主任・薬務主任)、薬剤師7名の13名で構成されています。

当院では、2014年(平成26年)から、病棟薬剤業務実施加算の算定を開始し、ICT、NST、

緩和、化学療法サポートチーム、吸入指導チーム、骨粗鬆症チーム等へのチーム医療にも積極的に参加し、他職種との連携強化も図っています。



ポリファーマシー対策として、病棟業務へも積極的に介入しています。また簡易懸濁マニュアルや、吸入指導マニュアルなどを作成し、定期的に薬薬連携カンファレンスを開催して地域の調剤薬局と指導方法を共有しています。さらに患者宅の残薬減少等も考慮した「疑義照会事前合意プログラム」を作成し、地域との医療連携やポリファーマシー対策などを通し、超高齢社会における医療の提供方法などを常に考えながら、医療を担う一員として、薬剤部全員で日々業務に取り組んでいます。

(文責 片岡 綾子)

病院 HP <http://www.toneyama-hosp.jp/>



<https://www.facebook.com/独立行政法人国立病院機構刀根山病院-1399539483455047/>

「平成 29 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修」を受講して

神戸医療センター 荒川 宗徳

5 月 15 日から 5 月 19 日までの 5 日間、国立病院機構本部にて初級者臨床研究コーディネーター養成研修を受講しましたので報告いたします。

本研修では厚生労働省や各独立行政法人、製薬企業、医療機関、被験者など幅広い分野の講師の方々より臨床研究・治験を実施する上で必要となる知識や考え方、実際の現場での業務を学ぶ事が出来ました。私は受講時点では、臨床研究業務に関して全くの未経験で参加させて頂きました。そのため医薬品開発の基礎及び国としての体制から国立病院機構の治験に関する体制といった活動方針やあり方から、現場における CRC の役割や必要となる知識・スキルまで幅広い内容を一度に学ぶことができました。そこで「臨床研究に関わる医療人とは」という意味を知り、実践していく上で非常に有意義な機会を得ることができたと感じました。

また、演習ではインフォームドコンセントのロールプレイも行いました。実際に体験してみて感じたことが 2 つありました。一つは被験者にわかりやすい言葉で説明するためには、説明文書の記載内容のみならずその治験全体について十分理解してなければならないということです。もう一つは、被験者に適切な説明を行うためには、その方の反応を見ながら説明を進めていくことができる高いコミュニケーションスキルが必要であるということです。普段から病棟業務で患者さんへの薬剤指導を行うことも多々ありますが、それに加えて私の説明が被験者の治験参加への判断を左右します。そのため高い意識を持って一つ一つの説明にあたる必要があると肌で感じることができました。今後、実際に治験や臨床研究の説明補助を私が行うこともあると考えると身が引き締まるように感じました。

研修では薬剤師だけではなく看護師、臨床検査技師、事務職の方など臨床研究業務に関与する多様な職種の方が参加されており、そして所属も国立病院機構に限らなかったため、多様な方々と情報交換や交流を行うことが出来ました。実際に業務を行っている多くの方々から御意見を伺うことが出来たのはとても貴重な機会です。今後自分が治験・臨床研究業務に取り組んでいくうえでのイメージの構築や意識付けにとって、とても重要な機会と感じました。

今回 10 月付の人事異動に伴い神戸医療センターにて治験業務に携わらせていただくこととなりました。実務を行っていくにあたり習得すべき事項は非常に多いですが、研修を経たことにより各種情報の受け入れに対しては抵抗感も少なく感じている次第です。本研修で学んだ治験や臨床研究の考え方を基に、病院及び国立病院機構における臨床研究の活性化に対し、一助を担うように努めていきたいと思っております。

「第27回日本医療薬学会年会」に参加して

大阪医療センター 萬浪 綾乃

平成29年11月3日金曜日から3日間、千葉県にある幕張メッセ、アパホテル&リゾート東京ベイ幕張、ホテルニューオータニ幕張の3会場合同で開催された「第27回日本医療薬学会年会」に参加させていただきました。千葉県といえば、「ディズニーランド」「ディズニーシー」が有名です。今回の会場の最寄り駅、京葉線海浜幕張駅の途中には舞浜があり、車内にはディズニーキャラクターグッズを持った人や、電車の窓からシンデレラ城も眺めることができ、気持ちだけはディズニーランドへ行った気分を味わいました。

医療の進歩や、チーム医療の推進など、薬剤師に求められる職能と役割の変化は著しく、



薬剤師がこれから更に医療に貢献できますよという気持ちを込めて開催された本学会のテーマは、「医療薬学が切り拓く薬剤師力の深化・醸成～医療人としてより輝くために～」。今回私は担当病棟(産婦人科・乳腺外科)に関係する、周産期・がん・緩和領域を主として学んできました。

「妊娠期における感染症と母児のリスク管理」では近年問題視されているトキソプラズマ、サイトメガロウイルスなど、

妊娠期にウイルス感染することによる胎児への影響、また、感染を防ぐには何に気を付ければ良いか、「小児・周産期と予防接種」では近年嫌厭されがちなワクチン接種の重要性、ワクチン接種による副反応問題、ワクチンの多様化多様化、「小児患者に如何に「くすり」を伝えるか-アレルギー疾患の薬物療法から-」では小児へのステロイドの適正使用、乳児期のアトピー性皮膚炎への適切な対処、様々なことを学ぶことができました。学んだことを普段の業務に活かせるよう、日々努力をしていきたいと思ひます。



「第71回国立病院総合医学会」に参加して

近畿中央胸部疾患センター 下川路 亮太

平成29年11月10日、11日に香川県高松市で行われた第71回国立病院総合医学会に参加させて頂きました。今回の学会では、通常のポスター発表ではなく、eポスターと呼ばれる70インチの大型モニターを用いた発表形式が初めて導入されました。私にとってもeポスターは初の試みであり資料を作成する時から興味を持つ反面、不安も感じていました。演題名は「バーコード認証システム導入による鑑別業務の調査」で発表しました。

発表ですが、私は二日目の発表だったため、一日目は呼吸器疾患を中心に他の発表者を聴講しました。モニターは大きいため少し離れていても文字は見えますが、マイクを使っているはずなのに、周囲の音で発表者の声がかき消され少し残念な点もありました。また、画面の操作も慣れないためか少し戸惑っている発表者も多く見受けられました。これらを踏まえ、自分の発表ではシンプルな動作と大きな声で発表することを心掛けました。発表の時には当院の院長も見に来ていただき、緊張しながらも無事終えることができました。発表終了後に後部にいた友人に声がとどいていたのか確認したところ聞こえていたようで安心しました。

全国の国立病院機構の施設、他部門が集まる学会であり、薬剤師として普段働いているだけでは知りえない情報が多く詰まっている場でした。当院からも医師や他のコメディカルの先生方が多く参加しており、当院の業務も改めて再確認することもできました。一つの疾患に対して、職種によっては関わる視点が違うので、今後も他職種ともコミュニケーションを取って患者に介入していきたいと感じました。

また、当院の同年代のコメディカル仲間たちも発表していたため、他職種の発表も応援し、そして刺激を受けることもでき、私にとってとても有意義な学会となりました。発表会場も香川県らしく、無料でさぬきうどんが食べられるおもてなしブースがあり、他部門のメンバーとコシのある美味しいうどんを食べたり、高松駅近くのかかね温泉に行ったりと疲れながらも、ちょっとした旅行気分も味わえ、学会を終えることができました。明日からまた今学会のテーマのように自分の「道」を歩んで頑張っていきたいと思います。



平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会臨時総会報告

大阪南医療センター 水津 智樹



【開催日時】平成 29 年 10 月 21 日（土） 12:30～13:30

【場所】ハイアットリージェンシー大阪

【出席者】162 名、委任者 149 名（会員数 331 名）

【司会進行】関本副会長（神戸医療センター）

【議長】川端副薬剤部長（国立循環器病研究センター）

<配布資料>

平成 29 年度近畿国立病院薬剤師会臨時総会資料

I. 審議事項

会則・細則の変更について

河合総務担当理事より事務局設置施設変更、循環器病研究センター正式名称誤記修正、会長選出期間の変更、認定事業委員会削除、委員会規定変更について資料に基づき説明があった。

以上について審議の結果、賛成多数で承認された。



II. 報告事項



関本副会長より認定事業について資料の通り報告があった。

以上

平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム特別講演会報告

大阪南医療センター 木本 大樹

平成 29 年 10 月 21 日にハイアットリージェンシー大阪にて 2 名の先生方にご講演頂いた
ので報告する。

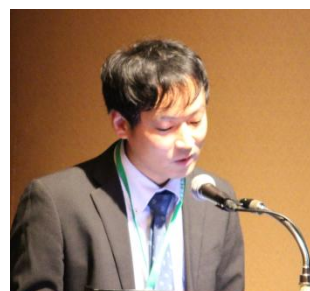
講演 I

演題：リウマチ疾患における当院での薬剤師の取り組み

講師：独立行政法人国立病院機構 大阪南医療センター

川上 智久先生

現在、大阪南医療センターにおけるリウマチ・膠原病・アレルギー内科の入院患者数の内訳として一番多くを占めているのが関節リウマチ患者である。また入院治療だけでなく、外来における生物学的製剤使用患者も多く、化学療法全体の 46.5%がリウマチ科という現状である。薬剤師は、外来・入院の生物学的製剤投与時のレジメン・投与量・投与間隔の確認を行う他、副作用管理、自己注射製剤の指導、吸入薬の補助具の指導にも力を入れている。院内だけでなく、兵庫県立加古川医療センター・新潟県立リウマチセンターとの合同カンファレンスにも積極的に参加し、施設での取り組みについて情報交換を行っている。これらを通じて、患者の治療に貢献するべく活動を行っている。



特別講演



演題：膠原病の最近のトピックス

講師：近畿大学医学部 血液・膠原病内科 教授

船内 正憲先生

膠原病とは、全身の複数の臓器に炎症が起こり、臓器の機能障害をもたらす一連の疾患群の総称であり、今回はその中から関節リウマチ・血管炎症候群・肺高血圧についてご教示いただいた。

関節リウマチの治療として DMARDs があるが、その中でアンカードラッグにはメトトレキサート(以下 MTX)があげられる。MTX を中心に生物学的製剤を併用した治療が主であり、関節リウマチ管理のアルゴリズムに従って治療が行われる。Treat to Target (T2T)とは、関節リウマチの治療目標を定めて行おうとする世界共通のガイドラインである。T2T を励行し、薬剤ごとの特性を生かした治療を行うことで治療の幅は広まってきているが、それとともに副作用のリスクが高くなり観察も重要となる。感染症として活動性結核や B 型肝炎を発症するリスクが高いことが示されており、治療中、また治療後も結核・ウイルス性肝炎の再活性化には注意すべきである。

血管炎症候群とは、血管あるいは血管周囲に炎症細胞の浸潤があり、免疫学的機序により炎症とその結果生じる組織障害を引き起こす症候群のことである。臓器障害の範囲、程

度が甚大なため予後不良が問題とされている。治療としてはシクロフォスファミド静注療法（IVCY）が基本になっており、これに加え、リツキシマブや抗サイトカイン療法の効果も示されている。

肺高血圧症の定義として、安静時平均動脈圧が $mPAP > 25\text{mmHg}$ となっている。しかし、肺高血圧症は重篤で難治性であることが多いので、早期診断・治療が重要であるため、定義に満たなくても治療を開始する場合もある。原因の半数は膠原病であることが分かっており、膠原病の治療と肺高血圧症の治療を並行して行う必要がある。しかし、肺高血圧治療薬には、膠原病治療薬との併用注意や禁忌の薬剤が多いため、薬剤師による相互作用の確認は重要である。



平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム報告

大阪医療センター 明石 直子

日時：平成 29 年 10 月 21 日 13 時 40 分～16 時 10 分

担当：近畿国立病院薬剤師会 チーム医療委員会

場所：ハイアットリージェンシー大阪 3 階

参加者：151 名

近畿国立病院薬剤師会チーム医療委員会主催の委員会シンポジウムが開催されたので報告する。

「ステロイドについて考える」をテーマに掲げ、チーム医療委員会小委員会に設定されている、がん・感染・栄養・循環器・糖尿病・緩和精神の 6 領域の各視点より、ステロイドの使い方、副作用とそのマネジメント、チーム医療での薬剤師の関わりについて、ワールドカフェ風の参加型シンポジウム（回転ずしシンポ）でディスカッションをおこなった。参加者全員が各領域テーブルを回れるよう、15 分×6 ラウンドでディスカッションをおこない、7 ラウンド目に元のテーブルに戻り、各領域テーブルで得た知識や情報を模造紙に書き込み、グループ内で共有した。



テーブルにはあらかじめ各小委員長が準備しておいたキーワードメニュー表が配置されており、会話のきっかけ作りができるよう工夫がなされていた。また、カフェ店員に扮したファシリテーター（各小委員長・副小委員長など）のサポートもあり、和やかな雰囲気で見聞交換がおこなわれた。

クロージングでは動画撮影した模造紙をスクリーンに映し、参加者から今回のシンポジウムで得た知識や情報・感想を話してもらい全体共有をおこなった。



知識習得の一例として「ニューモシスチス肺炎の危険因子としてステロイドがあり、ST合剤による予防投薬が推奨されている事を知った」とコメントがあった。また、参加した感想では「世代領域を超えた知識や情報が得られ、有意義な時間を過ごせた」「経験から基づく情報が知れてよかった」とコメントがあり、参加充実度の高さが伺えた。

終了後にはアンケート調査がおこなわれた。本紙面をお借りし、集計結果を一部報告する。アンケートは112名より回答を得た（回収率74.1%）。「今回のテーマの内容に興味・関心をもてたか」については、「もてた」及び「ややもてた」を合わせ97%であった。「テーブル（領域）ごとにテーマを設けることで、役立つ情報を広く得ることができたか」については、「できた」及び「ややできた」を合わせ93%であった。「今回のワールドカフェの良かった事（自由記載）」については、「キャリアに関係なく話せた」「自分の病院にない科の話が聞けた」「苦手な領域も気楽に話し合えた」「ぐるぐる回ることによって他のグループの意見を聞くことができ勉強になった」などの意見があった。アンケート集計結果より、本シンポジウムにおいて、多くの参加者がステロイドに関連した知識や情報を深めることが出来たと感じた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、企画・運営等のご指導・ご協力を頂きました諸先生方、このような機会を与えて下さった会員の先生方に厚く御礼申し上げます。

「平成 29 年度 近畿国立病院薬剤師会委員会シンポジウム」に参加して

大阪医療センター 井後 星哉

平成 29 年 10 月 21 日(土)にハイアットリージェンシー大阪にて開催されました、近畿国立病院薬剤師会委員会合同シンポジウムに参加しましたので報告させていただきます。

本シンポジウムは「ステロイドについて考える」をテーマとして「がん」、「緩和・精神」、「循環器」、「糖尿病」、「感染・免疫・アレルギー」、「栄養・褥瘡」の 6 つの領域を回転ずし方式で回り、各領域でのステロイドについてワールドカフェ形式で討議しました。

「がん」領域では、がん治療薬として血液系がん用いられる。ステロイド長期使用による感染症や骨粗鬆症のリスクへの対策・提案は投与約 1 ヶ月で行うが、悪性リンパ腫の患者の場合には早期から対策する、などがあげられました。

「緩和・精神」領域では、倦怠感・呼吸困難・嘔気などに対してステロイドを使用する。経口と静注でバイオアベイラビリティがあまり変わらないため投与経路の変更が容易。せん妄が副作用として出ることがあるため家族や介護にあたる方に対し説明の必要がある、などがあげられました。

「循環器」領域では、ステロイドには様々な副作用があるが、その中でも血糖上昇が起きやすい印象がある。血糖上昇の副作用を避けたい場合は鉍質コルチコイド作用の弱い薬剤を提案する、などがあげられました。

「糖尿病」領域では、糖尿病の家族歴や肥満の患者ではステロイド投与による血糖上昇がみられやすいため血糖を測定することが望ましい。ステロイド投与に合わせてインスリン投与量を設定している場合、ステロイド漸減により血糖値が低下し低血糖のリスクがあるためインスリン投与量調節の必要がある、などがあげられました。

「感染・免疫・アレルギー」領域では、ステロイドの短期投与より長期投与時に免疫抑制が現れやすい、などがあげられました。

「栄養・褥瘡」領域では、ステロイドは食欲不振に対して使用されるが味覚障害が現れることがある。褥瘡治療時に肉芽の過剰増殖に対してステロイドの外用剤を使用する、などがあげられました。

日常業務の中では消化器外科の病棟を担当しているため、抗がん剤治療に伴う制吐に対してや皮膚障害に対する外用での使用などを見てきましたが、シンポジウム参加を通して多くの方の知識・経験を聴くことで様々な場面でのステロイドの使用について学ぶことができました。今回ワールドカフェ形式の企画に初めて参加しましたが、気になる点を気軽に話し合うことができるとてもよかったです。今回のシンポジウムで得た知識を今後の業務に活かしていきたいと思えます。

新採用者紹介

～①氏名 ②施設 ③座右の銘、好きな言葉 ④抱負～

①長谷部 茂(ハセベ シゲル)

②大阪医療センター

③実践躬行

④10月より大阪医療センターに配属になりました長谷部茂です。配属から1ヶ月たちましたが、まだまだ分からないことばかりで、日々自分の未熟さを痛感しています。ただ業務をこなすのではなく、何事にも目標を立てて真摯に取り組んでいきたいと思いますので、ご指導よろしくお願い致します。



趣味のページ～20キロマラソン初挑戦～

東近江総合医療センター 豊田 悠二

白井先生からバトンを引き継ぎました、東近江の豊田と申します。趣味のページということで学生時代はフットサルをやっていましたが現在はこれと言った趣味はありません。ここでは当薬剤部でここ1年ぐらい起きているマラソンブームに私もついに乗っかるというお話をさせていただこうと思います。

京都医療センターから横山先生、大阪南医療センターから本田先生が異動して来られ、マラソンを趣味に持つ先生が増えた頃から、岩切先生(現：大阪南医療センター)を部長とする当薬剤部に陸上部が発足しました。体を動かす事は好きな私ですが、昔から「マラソン」だけは好きになれませんでした。マラソン愛好家の先生方には失礼だと思いますが、「ただただ走って自分を追い込んで何が楽しいねん。」とっていました。

今回参加した「第7回NICOチャリティ・ラン鴨川」の集合場所は自宅から徒歩で約5分のところで参加できない理由が見つからなく、ついに参加することになりました。何回か練習しなければと思いながらも1回しかできず、本番当日を迎えました。少し小雨が降る程度であり、暑くも寒くもなく程よい気候で走ることができました。10キロを過ぎた辺りから、走りたくても体(特にお腹周り…)が重く思ったように走ることができなく、途中何回も歩いてしまいました。太った証拠やな…と本当に痛感しました。なんとか完走は出来たものの結果は一緒に参加したメンバーで最下位でした。

このマラソンを終えてからお腹周りが重たかったことが自分の中でショックであり、入職当時から仕事の日はお昼時に毎日食べていた「プリン」を控えています。この「プリンダイエット」がどこまで効果があるか分かりませんが…(笑)

次回は、大阪南医療センターの齊藤先生にお願いしております。
よろしく願いいたします。



編集後記

♪ 2017年も残り1か月程となりました。季節が一気に進んだ感がありますが、皆様、体調など崩されていませんか。

♪6月に東京都の上野動物園で5年ぶりに生まれたジャイアントパンダの赤ちゃんの名前が「シャンシャン(香香)」に決まったと発表されました。「香」は中国語で人気者という意味もあるそうです。来月には一般公開が予定されており、人気者になりそうですね。

♪岩波書店が発行する国語辞典「広辞苑」について、来年1月12日に改訂版を刊行すると発表されました。2008年以来10年ぶりの改訂になります。約1万項目が追加され「ジェネリック医薬品」「OTC薬」なども掲載されるそうです。

♪陸上男子の桐生祥秀が、日本学生対抗選手権の100メートル決勝で、9秒98の日本新記録で優勝しました。日本人として初めて10秒の壁を突破し、日本の陸上の歴史に名を残しました。人類が初めて電気計時で9秒台に突入したのは、1968年にジム・ハインズ(米)が記録した9秒95で、それに遅れること49年。ようやく日本選手が9秒台に突入しました。

♪今月号も薬剤部紹介、薬剤師会講演報告、学会報告、新採用者の抱負、趣味のページなど、充実した読み応えのある内容となっております。現委員での最後の会誌となっております。最後までご熟読ください。

(A.N)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

近畿国立病院薬剤師会会誌
発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局
(独立行政法人国立病院機構大阪南医療センター薬剤部内)

第五十二号 平成29年11月発行

大阪府河内長野市木戸東町2-1

発行人 会長 本田 芳久 (大阪南医療)

編集 広報担当理事 本田 富得 (東近江総合医療)

広報委員 高原 由香 (刀根山) 竹松 茂樹 (京都医療)

中西 彩子 (近畿中央胸部疾患) 岩槻 瑠美 (南和歌山医療)

村津 圭治 (神戸医療) 竹原 健次 (兵庫中央)